

目的 従来、身体に適合する衣服原型を設計するために官能検査法を用いた実験的研究が行われている。本研究では、官能検査におけるパネルの判定能力に關する研究の才/段階として、立位静止状態における体型人の衣服の適合性に關する着用実験を行い、観察者の判定能力を検討した。

方法 着用実験における判定者を被服の設計・製作に対する経験の違いにより、2グループに分け、1グループ3名とした。実験の要因は被検者の体型、胸囲のゆるみ、袖ぐりの深さ、袖幅の4因子で、それぞれ3水準とし、実験の効率を高めるために、それらを直交表にわりつけた。測定した特性値は「身頃」、「袖幅」、「袖ぐり」の3種類である。官能検査における判定基準は、「きつ—ややきつ—ちょうどよい—ややゆるい—ゆるい」の5段階とした。解析には累積法を用いた。分散分析の結果と密度度数により、グループ間の判定内容について比較を試みた。さらにSN比により判定の精度の比較を行った。

結果 被服に対する経験の深いグループは、判定に判定者の個人差が顕著に表われている。また被検者の体型の差が判定に影響をおよぼしている。経験の浅いグループは深いグループと比較してややあいまいな判定を下す傾向が認められた。SN比による判定の精度については、「身頃」、「袖ぐり」では経験の深いグループの精度が浅いグループよりやや高く、「袖幅」では経験の浅いグループがわずかに高い。